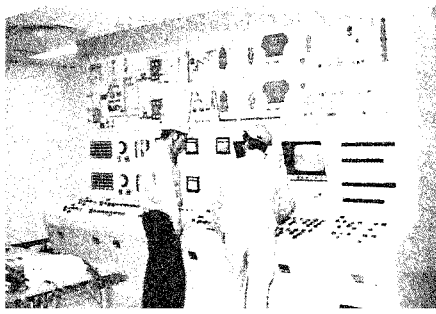


まるで大きな研究所の内部をのぞくよう!!

新ゴミ焼却施設試運転快調に進む

一カ月後に迫った操業開始を前に、いま大月都留衛生組合では、先ごろ完成した新ゴミ焼却施設の試運転に追われています。

外側からみると高い煙突、(高さ約五十八m)が立っているほかは、なんの音もしない大きな新しい工場といった感じですが、ひとたび内部に入るとそこは最新技術の粋を集めた、まるで大きな研究所のメカをみるような気がします。複雑に入り組む太い金属パ



イブや様々な形の計器類。その間をぬって地下から地上三階までを鉄製のはしご階段が迷路のように走っています。通路の床は網の目状の金属

できていて、探光効果が地下までゆきわたるようになってい

ます。また機械類、建物の床、壁はすべてシルバー塗装されていて明るく、圧迫感をい

だかせません。プラントホールと呼ばれるゴミの投入口は地下にあり、ここから投入されたゴミは、一たんゴミ貯留庫(ピット)

に収まります。このピットは両市から運び込まれるゴミ二日分を貯留することができ

るそうので、のぞきこむと大型ダンブが数台はスッポリ埋まるうかと思われ

る大きさです。ここに集められたゴミは燃焼する順番をまつ間、臭気が外にもれないようにエアーカーテンで完全に外部と

と断されます。ピットのゴミは大型クレーンで吊られたバケットで移送

され、ゴミ破砕機・貯留ドラムなどを通して、いよいよこのゴミ焼却施設の心臓部とも

いうべき焼却炉に入ります。この間、ゴミは工場内に露出

することなく、工場内でも臭気はありません。焼却炉は旋回流型流動床焼却炉とい

い、焼却炉の中に砂を投入しながら流動状態にしてバーナー加熱し、この灼熱した砂(八〇〇度ぐ

らい)がゴミを燃やすしくみになっています。何億という砂の一つ一つが熱を伝えて燃焼が始まると、この熱で炉内の温度が平均化

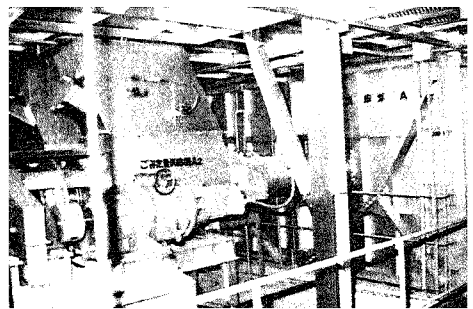
するため、可燃物は加熱することなく瞬時に焼却されるのだそう

です。この炉で砂を流動させたりゴミを燃やすための空気は、さきほどのピット室からの

ゴミの臭気を吸引したもので、このへんも実に合理的にできています。のぞき窓から炉内をみると赤というよりピンク色に近い

炎がみえるだけでゴミはまったくみえません。完全燃焼している証拠です。排ガスはガス冷却室で四〇〇度まで温度を下げてから、バ

イジンを完全に取り除くため電気集塵器に入ります。こうして排ガスは清浄なガスとなり、はじめて煙突から大気に放たれるわけです。この施設の特徴の一つに、ゴミ焼却の一連作業をすべて自動化している点があげられます。機械操作はもとより、炉内



観察カメラ、様々な計器の測定データは、すべて中央線作室で操作、分析されます。いわゆる集中制御方式の採用です。最後に焼却灰と不燃物ですが、焼却灰については完全な灰になり粒状の固形物は残りませんが、灰と分けられた不燃物は、破砕機にかかってか

ら炉を通ってきたものであるにもかかわらず、かなり大きなものが残ります。担当技師の話では、この不燃物の大きなものが機械の調子を狂わせる要素になるそうです。不燃物の処理コンベアに乗って出てくるものは、水道の蛇口、鉄ホルト、なべの破片など様々ですが、これらの不燃物でも金属のものはほとんど資源として再利用できます。この新しいゴミ焼却施設の完成を機に、私たちは改めて生活環境の美化、資源の再利用を考えたゴミの出し方、ゴミに対する考え方について、みずから問い直す必要があると思います。